



1. 新人作業員は正確な技術と知識を得るまでベテラン作業員とペアになり、細かな指導を受けます
2. 指差し確認で、安全で確実な作業を心がけています
3. アームを伸ばしてトラックにコンテナを積みリースタッカー

〔巻頭特集〕 敦賀海陸運輸株式会社

海と陸を繋ぐ物流の架け橋

敦賀港の物流を担う地元企業、敦賀海陸運輸株式会社。バスやタクシーなどの旅客業でも地域の人々に親しまれ、開港120年を迎えた現在、新たな事業を展開しています。敦賀とともに成長を遂げてきた、敦賀海陸運輸に迫ります。



石炭船での作業に使われる多目的クレーン。地上約30mの高さに操縦席があります

information
敦賀海陸運輸株式会社
 本社所在地 / 敦賀市桜町2-10
 TEL 0770-22-3111
<https://www.tsurugakairiku.co.jp>

(右) 足が不自由な人や、車での移動手段がない人に向けたタクシーの運行も実施。車いすのまま乗り込めるようスロープが付いています(左) 陸上交通の要としても活躍。観光バスやコミュニティバスだけでなく、子どもたちを地域の小学校へ送り届けるサービスもしています



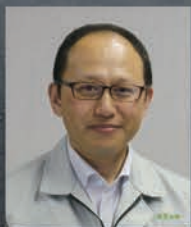
「昔は、作業員の仕事を固定して一つの現場に専念してもらいましたが、今は機械も増え、作業が複雑になったため、一人で何役もこなさなくてはなりません。従業員にはいろいろな資格を取るためにがんばってもらっています」と有馬社長は語ります。荷役機械の操縦に必要な、各種クレーン免許の取得費用は全額負担。取得後も免許保持者のベテラン作業員と組み、多くの段階を経てから実務に移るよう配慮しています。

管理本部総務部の村中寛さんは「波で揺れる船の上や、地上30メートルでの作業には危険がつきもので

「私たちは、敦賀とともに成長してきました。あちこちへ物資を届け、世界とも繋がっていますが、私たちのホームはここ、敦賀です。地域を守り、活性化に貢献していかなければなりません」と有馬社長は力を込めます。

創業から今日に至るまで、日本の物流を支えてきた敦賀海陸運輸。経済、そして市民の暮らしの要として、この先も活躍が期待されます。

進化し続ける地元企業
 日本経済を担いながら
 敦賀の雇用と交通を支える



管理本部総務部
村中寛さん
 数々の部署を束ね、事業のサポートを行う管理本部。地域の雇用や従業員に成長を促すため、親身になって取り組みます



代表取締役社長
有馬茂人さん
 敦賀海陸運輸三代目社長として、時代のニーズに合わせて事業を展開。地域の雇用と活性化にも貢献しています

敦賀海陸運輸は、敦賀港における港湾運送事業を柱に、貨物自動車運送事業、タクシーやバスの運行といった旅客観光事業も展開しています。

「市民にとって、私たちの港湾運送事業は間接的なものですが、バスやタクシーは多くの人が利用します。移動手段を持たない人を助けたい」と有馬社長。同社は、市内の巡回バスや観光バス、統廃合で通学が困難になった学生の通学を支えてきました。

核家族化や少子高齢化が進んだけれど、暮らしに寄り添う移動手段は不可欠です。しかし、車を持っていない、自宅からバス停まで距離が遠い、歩行が困難という人も多いのが実情です。そこで、敦賀海陸運輸はさまざまな車両を活用し、利用者の要望に合わせた利便性の高いサービスを提供しています。



敦賀・金沢と釜山・馬山を結ぶ、国際RO-RO船「SANSTAR DREAM」。週2便就航し数回、総トン数(G/T)1万1820トンを誇ります

終戦を迎え、敦賀港は軍需基地の役割を終えます。「日本が復興の準備に取りかかったとき、人々は燃料を必要としました。これにより、石炭が入ってきます。昭和30年代にな

り、小規模な運輸会社が多かった敦賀では、大量の物資の受け入れ態勢が整っていませんでした。このため、政府は県を通じて企業統合を進め、前身である敦賀海陸運送が設立されました。「膨大な物資を効率良くさばくため、運輸業者の窓口を一本化する狙いがあったのでしょう」と代表取締役社長の有馬茂人さんは語ります。

戦時下にあった創業当初、人々に働き口を提供する目的も担っていた敦賀海陸運輸。戦争が終わり、港に船が入ってこない状況でも、人々の雇用を守るべく奮闘しました。「現在も、地域の雇用を守ることは、地元企業としての使命です」と有馬社長。物資は世界経済の景気増減し

日本海沿岸部の中央に位置する敦賀港。江戸時代中期から、大坂と蝦夷地(北海道)を結ぶ北前船貿易の中継地として栄えてきました。

第二次世界大戦中の1943年、政府は軍需省を設けて民間軍需工場に直接管理に乗り出します。学徒出陣や徴兵適齢1年引き下げなどの非常措置を取り、国内戦時体制の強化に努めました。敦賀港は、満州と直結する安全港として軍需基地化されます。満州からの大量輸入のほか、本土防衛のため戦車や大砲が大陸から逆輸送され、敦賀市は一時、万余の軍隊で埋まりました。

今日、敦賀海陸運輸は港での運送業に加え、貨物船、客船の代理店業務と、港に関わるさまざまな事業を展開しています。また、輸出入手続きのサポートや国内でのトラック輸送など、物流に関わるあらゆる業務をしています。平成30年の荷受量は、約1600万トン。日本海側の港では新潟に次ぐ規模を誇ります。

今年、開港から120周年という節目を迎え、4月から博多港への定期航路が開通されました。九州の物資が敦賀港を経由して、主に中京・関西へ運ばれ、一部の貨物は苫小牧便へと積み替えられます。「これまで、日本海側で九州と本州をつなぐ航路はありませんでした。海上輸送網が充実することはもちろん、既設航路である敦賀港から苫小牧港の航路もより活用できます」と有馬社長は先を見据えます。

物流の玄関口として 日本経済を支え続けて

敦賀港もそれに応じて海外への航路を確保したのです。

と、家を建てるため、港は木材であふれました」と有馬社長。高度経済成長期に入り、多くの企業が海外への輸出を本格化させた際には、敦賀港もそれに